

数字とキーワードで見る まちづくりの現在地。

「人・自然・伝統 与謝野で織りなす 新たな未来」。これは、みんなでつくりあげた第2次総合計画（平成30年度～令和8年度）に掲げるまちの未来像です。第2次総合計画は五合目にさしかかり、今年度は後期4年間の基本計画をつくる年になります。そこで、今月号から連載をスタートします。3つの「み」（みんな、みらい、みえる）を基本理念に、7つの分野別方針に基づき進めてきたさまざまな取り組み。今月号では、3つの分野について、数字とキーワードで振り返り、まちづくりの現在地を確認します。

まずは5年前の住民のみなさんの願いや思いを振り返ります /
特に力を入れるべき施策ランキング (平成29年まちづくりアンケート結果)

40歳以上 (584/687件)		15歳～39歳以下 (103/687件)	
1 新たな産業起こしへの支援と雇用の確保	46.7%	1 保育サービスや子育て支援の充実	48.5%
2 災害に強い山や川づくりと防災体制の強化	37.6%	2 道路網や鉄道・バスの充実	46.6%
3 高齢者や障害者の福祉の充実と社会参画の推進	36.4%	3 新たな産業起こしへの支援と雇用の確保	35.9%
4 道路網や鉄道・バスの充実	32.2%	4 高齢者や障害者の福祉の充実と社会参画の推進	33.0%
5 住民、地域、事業者、行政の協働のまちづくり	31.9%	5 学校教育の充実	31.1%
6 計画的な土地利用や住宅政策の推進	23.4%	6 災害に強い山や川づくりと防災体制の強化	30.1%

5年前のみなさんの声は まちづくりの原動力に。

与謝野町では、第2次総合計画を策定するにあたり、住民のみなさんの意向を計画に反映するため、平成29年にまちづくりアンケートを実施しました。15歳以上の町内在住者から2000人を無作為に選り回答をお願いした結果、687件の回答が得られました。

「今後特に力を入れるべき施策」の設問では、30ある施策から最大5つまで選択可としたところ、40歳以上の世代では「新たな産業起こしへの支援と雇用の確保」が最多で、平成23年度の調査と比較すると「住民、地域、事業者、行政の協働のまちづくり」が5年前のみなさんの声がいかにまちづくりに反映されてきたのかが読み取っています。

「今後特に力を入れるべき施策」の設問では、30ある施策から最大5つまで選択可としたところ、40歳以上の世代では「新たな産業起こしへの支援と雇用の確保」が最多で、平成23年度の調査と比較すると「住民、地域、事業者、行政の協働のまちづくり」が5年前のみなさんの声がいかにまちづくりに反映されてきたのかが読み取っています。

「今後特に力を入れるべき施策」の設問では、30ある施策から最大5つまで選択可としたところ、40歳以上の世代では「新たな産業起こしへの支援と雇用の確保」が最多で、平成23年度の調査と比較すると「住民、地域、事業者、行政の協働のまちづくり」が5年前のみなさんの声がいかにまちづくりに反映されてきたのかが読み取っています。

産業と仕事

分野1 | 一人ひとりが個性を活かし安心して働けるまち

企業立地促進条例

企業誘致・企業立地は、合併から平成29年度まで実績がありませんでした。そこで、平成30年度に企業立地促進条例の奨励措置に雇用奨励金を新たに設け、さらに令和2年度には雇用要件の緩和と制度の拡充を図りました。これにより、企業へのアプローチがしやすくなり、平成30年度から令和2年度までの3年間で、町外企業4社が町内に進出、町内企業1社が新工場を立地。町内在住者の新規雇用も24人にのぼり、地域経済の活性化と雇用の確保につながりました。また、5社のうち2社は織物関連企業で、丹後地域で育まれた織物技術を求め、進出が決まりました。

条例適用企業数

5社

町内新規雇用者数

24人

新産業創出

平成27年度から栽培を開始したホップは、平成30年から令和3年までの4年間で、約4トンが収穫され、水稲・施設園芸に次ぐ新規作物として認知を高めています。町産ホップを使ったクラフトビールメーカーが町内に誕生したほか、アクセサリーやチョコレート、コーヒー等の商品化、収穫体験「ホップレンジャー」など、ホップを基軸とした六次産業化・農商工連携が進んでいます。また、商業団体が新たな地域資源として桜の葉に着目。令和3年には法人を設立し、食用桜の栽培・加工に取り組んでいます。

ホップ収穫量

4.0 t

食用桜栽培面積

88 a

日本一の織物のまち

与謝野町は人口1,000人あたりの織物事業所数が全国で最も多く、名実ともに日本一の織物産地です。この地で培われた織物技術や産地を次世代につないでいくため、設備投資支援や機織り職人養成講座、産地滞在プログラムを実施したほか、若手織物事業者らが国内の繊維産地を訪ね自らの経営力・技術力強化をめざし研鑽を積んだ「ひらく織」など、多彩な取り組みを展開しています。

織物事業所数

人口1,000人あたり 20.2 事業所

京の豆っこ米栽培面積

120 ha

水稲作付面積

680 ha

自然循環農業

与謝野町では有機質肥料の使用を促進し、化学肥料の使用を低減させる自然循環農業を推進してきました。その中核が町独自の有機質肥料「京の豆っこ」で、京の豆っこ米栽培面積は水稲作付面積の約18%まで広がっています。自然との共生を進める取り組みは、「第8回グッドライフアワード」（令和2年度・環境省主催）で特別賞を受賞するなど、各方面から高い評価を得ています。